

## 群馬県高等学校教育研究会音楽部会「平成30年度第3回授業研究会」

日 時 平成31年1月29日(火)  
会 場 群馬県立玉村高等学校  
教科・科目 芸術科・音楽I  
題 材 名 箏を奏でよう  
～たまむら歌留多に ふしをのせて～  
指 導 学 級 普通科 1年B組  
授 業 者 川上 寛子 教諭



### 1 開会行事

#### (1) 挨拶

##### ①清水 郁代 先生(群馬県高等学校教育研究会音楽部会長)

本日は、平成最後の授業研究会である。2月には部会演奏会である「みづち」の公演もあり、若い先生方も含めて熱心に取り組まれているということを知っている。こうした先生方の学ぶ姿勢や熱意をさらに次の世代に引き継いでいくという意味でも、本日の川上教諭の授業を楽しみにしている。授業を参観しながら、生徒との関わりや授業の進め方などを、それぞれの先生方が今後の授業に生かせるように学んでもらいたい。

##### ②八木原 賢 先生(群馬県立玉村高等学校校長)

本校は、1学年2クラスの小規模な学校である。学習への苦手意識をもっていたり、集中力が続かなかつたりする生徒が少なからず在籍していることは、同規模の学校にも共通する特徴の一つである。また、本校は県中央に位置することから、様々な地域の中学校からの進学者や外国籍の生徒も多い。そうした家庭環境なども踏まえて指導をしなければならないこともある。

本日の授業内容は、箏と「たまむら歌留多」の教材の融合であり、地域の伝統文化を教材とした探究学習の先取りであるとも考えられる。次期学習指導要領も見通しながら、伝統を大切にしたい川上教諭の授業の中から、目の前の生徒への最善の教育について考えていただけるよう、有意義な授業研究会にしてほしい。

##### ③島田 聡 先生(群馬県教育委員会高校教育課指導主事)

本日の授業研究会では多くの先生方に参加いただき、活発な協議となることを楽しみにしている。川上教諭の授業を参観し、日本の伝統音楽の指導や創作の学習の充実、またそれに関わる口唱歌の扱いについて考える糸口にしていただきたい。来年度から次期学習指導要領の移行期間となるが、学習評価の在り方についても確認できる機会にしてほしい。先生方にとって実りの多い研修になるよう、また今後の芸術教育の一層の発展への御協力をお願いしたい。

#### (2) 授業説明(川上教諭)

本校の生徒の実態として、特に音楽Iの授業で学びを深めるということが難しく、中でも創作の学習にはハードルの高さを感じている。その現状を少しでも改善しようと工夫したものが、今回の題材である。本日の授業研究会でご助言やご指導をいただき、今後の授業に生かしたいと考えている。

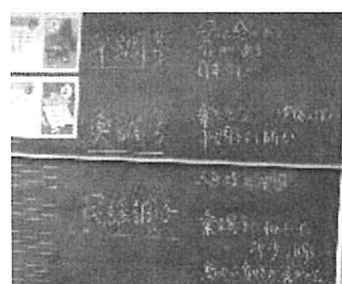
先週、インフルエンザ等で授業を欠席していた生徒も多いため、本時の授業の達成度には生徒によってばらつきがあると予測される。生徒の実態に応じて支援・指導を行っていききたい。

### (3) 授業研究係より

研究授業を観る「研究協議の視点」として、告示された次期学習指導要領を踏まえて次の3つを提案する。3.については参考資料にも目を通してほしい。研究授業後の授業研究では、各班で視点を選んで協議を行ってほしい。

1. 課題の質やレベルは、本時の目標を達成するために適切であったか
2. 本時の展開で、主体的・対話的で深い学びとなっていた場面はどこか
3. 「育成を目指す資質・能力」、「評価の観点のイメージ」、「新学習指導要領」と関連する指導と評価の計画はどこか

## 2 研究授業 学習指導案参照



## 3 授業研究

### (1) 授業者より趣旨説明等 (川上教諭)

生徒の学びを深めるためにはどのような手立てがあるのかということを考えながら組み立てた授業だった。本校の箏や爪は山田流のもので、現在の学校現場では珍しく、日頃は教材等の準備に苦勞している。今回の授業にあたっては山田流箏曲家である下野戸亜弓先生にアドバイスをいただき、箏曲そのものが衰退しつつある現状では、各流派にこだわらず、現状に合わせてあるものをうまく活用し、箏の魅力を伝えていくことが大切であるという教えを受けた。そこで、今回の授業では、歌とのつながりが深い山田流のよさを生かすために歌詞や唱歌は山田流のものを参考にし、教材や楽譜については山田流の横譜ではなく視覚的に分かりやすい生田流の縦譜のものを使用している。また、今回の生徒用のテキストは、ワークシートや楽譜などを2つのリングで綴じていき、学習したことを振り返ることができるようにすると共に、生徒が見開いて演奏しやすいようにした。

これまで本校では、4人で1面の箏を使用していくつかの技法を指導するような授業を行っていた。しかし、技能を身に付けるということに生徒の意識が集中し、音色や所作を味わう余裕がなく、また箏を弾かない時間の学習についても課題があった。そのため本題材では、3人で演奏するための「さくらさくら」を教材とし、技法を多用せず、音色や旋律の掛け合いなど音楽そのものの特徴を感じ取り、味わいながら取り組めるようにした。3つのパートの難易度に差があるので、生徒が演奏しやすいものを選んで全員で取り組めるという点でも本校の実態に合っていると考えた。

そして、学びを深めるためのキーワードとして「日本らしさ」を設定した。本題材の導入で、諸外国の撥弦楽器と箏を聴き比べ、箏の演奏から感じる「日本らしさ」とは何か？を生徒に問いかけたところ、「音に余韻がある」や「音色に深みがある」、「音と音の間に独特な間がある」などの意見や、所作にも着目した「凜々しい感じ」などの感想が挙がった。自分の意思を表現することが難しい生徒もいる中で、そうした発言は嬉しく感じた。

今回特に授業を組み立てる上で意識したことは、先に知識を教えてしまうのではなく、生徒が体験から感じ取

ったり、「どうしてこうなるのだろう？」という疑問をもったりしたきっかけの後に、知識や決まりごとを教えるようにしたことである。例えば、楽譜を渡してそれを歌い弾くのではなく、唱歌を聴いて音を探してから楽譜を渡すという方法をとってみた。唱歌をヒントに音を探している生徒が、良い表情で「この音かな？」と考えながら試行錯誤する様子が見られた。箏の音色や唱歌からそれぞれの生徒が聴き、感じ取ったことと、後に楽譜を見て確認した知識がうまくつながって学習できていたと思う。自分のイメージと楽譜を照らし合わせた際には、達成感をもった生徒もいたようであった。

創作でも、器楽同様に「作ってみよう」ということを生徒に示し、本時で初めて創作ということの意識付けを行った。さらに時間をかけて各調子の箏に触れたり、フィールドワークの振り返りをしたりしたかったが、生徒の様子を見ながら割愛し、本時の展開の主となる「ふしづくり」の導入につなげられるようにした。

今後は、グループで一つの「ふし」を選び、低音や合いの手などを入れて、3人で一緒に創作に取り組めるようにしたい。箏は、打楽器のような発音も工夫できる魅力的な楽器であり、例えば読み札にある川や水、花火などの情景のイメージを音づくりにつなげ、楽しみながら創作できることを期待したい。また、楽譜については知識として身に付けることが難しい現状もあるため、それぞれの生徒が自分なりの記譜をし、自分なりの唱歌を工夫して演奏を再現するようなアプローチを取り入れる予定である。今後も指導を工夫していきたい。



## (2) 研究協議① (班別協議)

## (3) 研究協議② (全体協議)

1班：鈴木(桐生南)、野口(大間々)、森田(前橋東)、藤嶋(関学附)、井上(藤岡中央)

研究協議の視点：本時の展開で、主体的・対話的で深い学びとなっていた場面はどこか

- ・授業全体を通して生徒と教員との対話が常にあってよかった。それが主体性につながっていた。
- ・生徒の発言を受けて展開につなげ、生徒の自己肯定感を高めていて、生徒が自分たちで取り組みたいという気持ちも高まっていたと感じた。
- ・イメージを言葉にすることの難しさを感じた。内容を深めようとするときにさらに課題があると思われるが、本時では生徒の実態に合わせた指導となっていた。
- ・生徒の「馴染みがある」という発言の部分を取り上げて、深めてもよかったと感じた。
- ・音楽の授業以外で、生徒がもっているイメージを生かしたり深めたりできるのがよい。教科横断的な授業としても生かせるもので、様々な深まりがあった。
- ・生徒と教員との関係性がとてもよく、その対話で授業内容が深まっていたが、生徒同士の対話による深まりがさらにあるとよいと感じた。
- ・楽器環境が整っていて、聴き比べなどができて、授業中の生徒の発言も多く、雰囲気よく進んでいた。
- ・地域と関連する教材を使って題材を指導し、学習するのがよかった。生徒それぞれがイメージをもつことは、トレーニングのように指導していくと、さらに音楽の言葉の広がりが出てきたり、音楽を形づくっている要素についても他の題材でも活用できたりすると感じた。
- ・歌留多の札を読む際に、生徒も教員も音階に合わせて読み方が変わっていたので、それを創作の学習の際に生かせる方法を考えていきたい。
- ・教員が「次はこれをやる」と伝えるのではなく、「次はどうする？」ときいて授業を進めていたことが特によかった。

2班：兒玉（高崎女子）、安斉（高崎商業）、黒岩（高崎）、五十嵐（長野原）、住谷（前橋商業）

研究協議の視点：「育成を目指す資質・能力」、「評価の観点のイメージ」、「新学習指導要領」と関連する指導と評価の計画はどこか

- ・生徒指導がよく行き届いていて、学校のよさが伝わった。教員の温かみを感じられた。
  - ・箏の音色を大切にしていることが、生徒の演奏に表れていた。
  - ・楽しい授業で、授業の展開の仕方に工夫を感じた、生徒の指名の方法がよかった。
  - ・評価が難しいと感じた。
  - ・全員がさらに学習内容の中に入って行くという意識をもてるようにすることも大切だと感じた。
  - ・生徒が意見を出しやすい雰囲気だった。
  - ・生徒が、感じ取った音階の雰囲気を説明する際の教員の言葉かけがよかった。
  - ・音階選びを範唱と一緒にできたのがよかった。
  - ・楽器の準備などが大変だが、生徒も仕組みが分かると楽しいと感じられると思った。しかし時間配分が難しい。
  - ・生徒指導と良い雰囲気の指導の境目が難しい。
  - ・生徒から「中国っぽい」という発言が出る雰囲気や、感性がとてもよいと感じた。
  - ・箏にシールを貼ったり、3列に並べたりするなど、生徒の目線での配慮がされていた。
  - ・今後、歌留多の言葉から創作を行うことは難しいように感じた。
  - ・生徒が移動する場面や唱歌の場面で、初めから班として何を行うのかを決めておいた方が、学習がスムーズだったように思う。
  - ・それぞれの調子のイメージを初めに確認して知識を身に付けてから、歌留多を選んでもよかった。
  - ・生徒全員とさらにやりとりができるような工夫が必要だと感じた。
  - ・グループの評価になってしまう心配もあり、その評価の方法も難しいと感じた。
- （川上教諭）評価は個人とグループでの活動の2段階で行い、グループでの評価についても、発言や取り組み状況などは個別の評価にもつなげる予定である。



3班：伴野（太田東）、東（前橋）、橋詰（太田女子）、勝山（万場）、近野（伊勢崎清明）

研究協議の視点：課題の質やレベルは、本時の目標を達成するために適切であったか

- ・「ふしづくり」までは到達できなかったが、歌留多に合った音階を選べる流れは適切だった。
- ・実際に試しながら選ぶことで、聴く→考える→組み立てるといった展開ができると感じた。
- ・教員が生徒とうまくやりとりをしながら授業を進めていた。我慢強く、コミュニケーションを大切にしていた。
- ・朗読しながら、それぞれの調子の音階の箏を弾く場面は、本時の授業で生徒が最も集中していた。
- ・40名弱の生徒だったが、教員が生徒全体をよく見て、それぞれの反応を拾っていたため、生徒の数はもっと少なく感じた。
- ・「さくらさくら」の弾き比べは、これまで練習してきたからこそ、生徒の反応がよかった。
- ・活動の自由さの中に、生徒が集中したり生徒の心が動いていたりするタイミングが何度もあった。
- ・教員のポジティブな言葉かけがよく、生徒の自然な関係が、生徒の心を開いていた。
- ・創作の手順を問いかけて、生徒から挙がった意見を示すという手立てが適切で、生徒の実態に合っていた。

- ・板書がシンプルで分かりやすかった。
- ・音の特徴を捉えるための環境づくりや授業展開についても必要だと感じた。

→ (川上教諭) 札を読みながら演奏することで、生徒が「分からない」という疑問をもつところから始められるようにした。今後、今日決めた調子が自分のイメージに合っているのかを振り返る場面や、楽拍子と民謡拍子の違いを他の楽曲も例に出しながら確かめる時間も設ける予定である。



4班：小川（利根商業）、引田（市立太田）、小川（四ツ葉学園）、角田（榛名）、武井（伊勢崎商業）

研究協議の視点：課題の質やレベルは、本時の目標を達成するために適切であったか

本時の展開で、主体的・対話的で深い学びとなっていた場面はどこか

- ・内容や質は適切だったが、教員のやりたいことが多過ぎてしまった印象だった。
- ・「試してみよう」という場面が、もう少しスマートになれるとよかった。
- ・「さくらさくら」を各調子で演奏するのは、最後の1フレーズでも変化が感じられるため、その部分だけでもよかった。
- ・イメージを言葉にしたり音にしたりする学習は、レベルの高い内容だったと感じた。
- ・生徒は学習のゴール地点が見えないまま教員についていっていたように思う。
- ・生徒の発言は質が高いものも多かったが、そうでない生徒もいた。
- ・どんな風に「ふし」を付ければよいかということ、さらに具体的に示せるとよかった。
- ・創作は、言葉に対する「ふし」なのか、全体的なイメージなのかが分からなかった。
- ・各調子の音を聴いて、生徒の中にイメージはできていたように思う。
- ・授業内容の理解が困難な生徒に対する言葉かけや、生徒の発言の仕方がよく、対話的な授業だった。
- ・授業で扱っていた3つの調子は似ていたが、これらを選んだのはどうしてか疑問に感じた。調子の性格の異なるものを選んでよかった。
- ・調子の雰囲気について、「少し違う」という印象では、日本らしさ、郷土の音という観点から選択することは難しいと感じた。
- ・歌留多も8種類あり、多いように感じた。
- ・箏は音が限定されていて創作を行いやすいと感じた。
- ・楽曲のまとめ方や音の着地点に、日本らしさを出せるとよい。
- ・今後の「ふしづくり」の学習について、言葉の5・7・5のリズムを生かすのか、反復などの構成も工夫するのか、どのくらいのルールの中で創作する予定なのかに興味がある。



→ (川上教諭) 「たまむら歌留多を歌う」というイメージで創作できるようにしたい。創作した「ふし」を歌って箏を弾くということが目標ではあるが、歌と演奏とを同時に行うことが難しい生徒については、「たまむら歌留多」を、言葉のイントネーションなどに注意して読みながら発表できるようにしたい。生徒に指示を伝え、一緒に取り組むということを小出しにし、生徒との対話で授業を進められるように意識した。



## 4 指導・助言等

### (1) 新潟大学 教授 伊野 義博 先生

本日の授業は見ていても楽しい雰囲気伝わって、授業研究会についても熱意のある議論が交わされ、群馬県の先生方の意識の高さを感じた。授業の構想がよく考えられており、「さくらさくら」を3つの異なる調子で演奏した後、すぐに調子についての知識を伝えず、調子の音階を聴いてその雰囲気を感じ取った後に初めて音と知識とを関連させていたことがよかった。そのため、生徒が活動を通して次第に音楽に没頭するようになっていったと感じた。シールを用いることで箏の機能が生かされ、それと同時に生徒との対話を授業に生かそうとする姿勢も見られた。

一方で、生徒にその都度指示を伝え、一緒に取り組むという「小出し五十六方式」について、さらにもう一度共通の課題に戻って考える「小出し五十六回転方式」を提案したい。例えば、たまむら歌留多の「ぺったんこ」という読み札の言葉の音の当てはめ方を考えた際、既習の「さくらさくら」ではどのように言葉に音を当てはめていたのかを問いかけ、模倣するように促すとより一層生徒のメタ認知が強化される。振り返りながら繰り返すという学習を行うことで、学習内容をさらに理解できるようになる。

それに関連して、自分たちが今体験したことはどのようなことなのかということを生徒が考えられるように、生徒の体験を認知へと結び付け、活動を学びの世界へと広げられるとよい。例えば、「箏は柱を動かすと音階の構成がこのように変わる」ということや、「ふしと言葉の関係はこうなっている」という発想を生徒自身がもてると、学んだことを応用できるようになる。また、生徒と指導者との対話ということから一歩進めて、生徒が音楽とも対話できるようにする支援も必要である。

さらに、生徒同士の対話も促すことができるよう、生徒から引き出した意見をもう一度他の生徒に返すということも大切である。「Aさんはこう思っているけれど、Bさんはどう思う？」などと投げかけ、生徒と指導者の直線的な関係ではなく、そこにさらに別の軸を加えて往還し、トライアングルをつくることも考えられる。その軸は生徒になるかもしれないし、音楽になるかもしれない。生徒や音楽を往還するというイメージをもつと、対話がさらに意味のあるものになる。

その他、「ぺったんこ」という言葉に関しては、音節やモーラなどの視点からどのような言葉と旋律が関連するのかを考えられるようにすると深い学びにつながる。そうすることで、先ほどの「さくらさくら」の場合はどうだろうか、「荒城の月」の歌詞を滝廉太郎と山田耕筰はどのように旋律に当てはめたのだろうか、などの問いに発展させていくことも考えられる。さらに、自分の好きな曲ではどうなっているのだろうか、英語やドイツ語の場合はどうだろうか、という新たな問いをもつことにもつながっていく。

本題材は、地域から日本、そして世界へと広がっていく視点をもつものである。そしてそうした地理的な広がり以外にも、日本のこの時代にはどのような音楽があったのかという視点や、教科横断的な視点も取り入れていくことも考えられる。また唱歌については、その様式を学ぶ時に、唱えて覚えるのか書いて覚えるのか、その中間なのかということ判断していくことが大切である。口頭性と書記性という唱歌の学び方の特性を、他の音楽を指導していく際にも応用してもらいたい。

### (2) 島田 聡 先生 (群馬県教育委員会高校教育課指導主事)

唱歌は口頭伝承によって音色や奏法、そして音楽そのものを伝えるという役割がある。一方で、楽譜(本題材においては箏の文化譜=演奏譜、タブラチュア)は、その音や音楽をどのような意図でどのくらいの時間演奏するのかという記録を伝える役割がある。音や音楽そのものを伝える唱歌と、演奏方法を伝える楽譜とを比較をする視点ももつことができ、双方を組み合わせながら授業の中で工夫して扱っていくことが大切である。つまり、唱歌だけでは、自身の捉えた音や音楽の質と音楽との関係に自身のなさを感じる生徒や、楽譜だけでは、音や音

楽を読み取ることをあきらめてしまったり、音そのものの質感を捉えることが困難であったりする生徒もいるだろう。特に、本題材のように器楽から創作へ学習を進める場合、唱歌と楽譜の片方だけを指導で用いた場合は、創作の学習まで至らないことも考えられる。本題材では、音そのものを伝える唱歌を導入で扱い、その後に楽譜で確認をするという授業展開に意味があり、生徒の実態に即していると感じた。唱歌と楽譜の両方を学習の場面に応じて使い分けることで、生徒は安心して課題に取り組んでいたと感じた。

指導法については、生徒の発言から授業を組み立てていくという徹底した「生徒ファースト」で行っていたことが特徴である。さらに、「たまむら歌留多」の読み札による心象や情景、それぞれの調子から得られるイメージなどを大切に、それらを整理して三重奏の楽曲を創作するという題材構成の意図が見られた。今後、楽曲を完成させていく過程で、本時で考えた創作したい楽曲のイメージや、創作に用いる調子のイメージを振り返ることができるという点で、本時の授業の役割は大きい。

創作に関する「イメージ」について、現行の学習指導要領の(3)創作、アの解説では、『「イメージをもって』と示したのは、… 表現したい音楽のイメージを膨らませながら、思いや意図をもってつくることを重視したからである。… 詩などに旋律を付ける場合は、詩の意味内容を踏まえつつ、言葉の抑揚、アクセント、リズムなどを生かす工夫も大切である』と示されている。そして、「調弦の異なる複数の箏の中から、表現したい音楽のイメージを膨らませながら、それに合うものを選んで簡単な旋律をつくり、さらに、箏の特徴を生かして、その旋律に別の旋律を重ねていくことが考えられる」とあり、この内容が本時の次の授業にあたるものである。本時では、3つの調子による「さくらさくら」を聴き比べることで、表情の多様さを感じ取り、イメージを膨らませることができていた。

さらに、次期学習指導要領の(3)創作では、「ア … 自己のイメージをもって創作表現を創意工夫すること」「イ … 表したいイメージと関わらせて理解すること」とあり、本時の授業では調子に関する知識に触れる前に、それぞれの調子の雰囲気を知覚・感受する場を設定することで、「イメージ」と「知識」の関わりを大切にしていた。また、「表したいイメージと関わらせて理解するためには、〔共通事項〕と関わらせて指導によって、表したいイメージと、音素材、音を連ねたり重ねたりしたときの響き、音階や音型などの特徴及び構成上の特徴などとの関わりを自分自身で捉えていく過程が必要である。」と、〔共通事項〕の位置付けも示されている。本時の授業で、生徒自身は「たまむら歌留多」と表したいイメージやそれぞれの調子との関わりを捉え、理解することができていた。イメージを抛り所に、それぞれの学習指導要領を読み取ると、本時の授業は次期学習指導要領の先取りということではなく、現行の学習指導要領の発展であると考えられる。そのような見方で再度、本時の授業とそれぞれの学習指導要領の位置付けを考えていただければ幸いである。

### (3) 群馬県高等学校教育研究会音楽部会

#### ①上田 裕信 先生(群馬県高等学校教育研究会音楽部会副部会長)

研修に取り組む先生方の表情がとても楽しそうであった。音楽の授業に限らず、学校生活の中で生徒の心を開くということが大切だと感じるが、本日の授業では生徒との対話を通してそれができていた。生徒が指導者の方に心に向けていない時には、どのような指導であっても生徒には伝わらない。各生徒の技術に応じた役割分担を行ったり、目標を設定したりといった配慮を行うことが、生徒が目的意識をもって主体的に取り組めるグループ活動につながるということを感じた授業だった。そうしたグループ活動での学習の積み重ねの経験により、生徒は達成感をもてるようになると思う。

本時の授業の中で、生徒それぞれが調子のイメージを伝え合うという場面があったが、感情を言葉で表現することはなかなか難しい。そのため、音楽の授業を通して日常生活の中でも使える言葉を増やしていけるような投げかけをしてもらいたい。感情を表す言葉を増やすことでイメージも広がる。また、イメージを考える場面で生

徒に枠を示し過ぎてしまうのではなく、その考え方の方向性を提示できるとよい。生徒からの言葉を生かして、そこから学びの視点を新たに設けられるようにすることが大切ではないかと感じた。

②大熊 信彦 先生（群馬県高等学校教育研究会音楽部会副部会長）

常に笑顔を絶やさず、生徒を受容するやわらかさがある一方で、毅然として無駄のないメリハリのある進行により、余裕をもった授業をされていた。小さな問いの積み重ねが生徒の興味を引き出し、地域の文化と日本の伝統音楽、そして学校の授業との接点を作っていたように思う。

本題材の指導計画では、1時間目の導入で他の文化圏の楽器と箏を聴き比べ、「日本らしさとは何か？」を生徒に問いかけ、最後の授業で再度「日本らしさ」を尋ねる本質的な問いが用意されている。本題材の学習を通して、生徒は最初の授業で考えた答えとは異なる考えや視点をもてるようになってきているはずである。生徒の思考の流れを大切にするという点で、本題材の指導計画は、全ての学校に持ち帰って応用できると感じた。

また、生徒が箏の演奏を体験したことによる喜びや「ふしづくり」を通して創作を行ったという自信、そして楽曲を完成できたという自己肯定感をもてるようにすることで、「日本らしさ」をさらに深く捉えることにつながっていく。生徒が音楽の楽しさを感じ、音や音楽の知覚・感受を通して日本の伝統音楽を学ぶことの意義を考えることのできる授業であった。

(3) 授業者より補足等（川上教諭）

今回の研究授業では、授業について根本的なところから様々なアプローチなどの細部まで、学ぶことが沢山あった。先生方からのご意見を参考に、今回の授業をさらに発展させていきたい。

5 参加者（敬称略 順不同）

清水 郁代（吉井）	大熊 信彦（太田女子）	上田 裕信（太田東）	島田 聡（教育委員会）
勝山 英城（万場）	兒玉 理紗（高崎女子）	住谷 伴（前橋商業）	黒岩 伸枝（高崎）
引田 麻里（市立太田）	橋詰 詩織（太田女子）	角田 幸枝（榛名）	五十嵐 桃子（長野原）
森田 尚子（前橋東）	武井 康博（伊勢崎商業）	安斉 太（高崎商業）	鈴木 香奈子（桐生南）
小川 唯佳（利根商業）	東 喜峰（前橋）	須田 諭美（吉井）	伴野 和章（太田東）
近野 裕子（伊勢崎清明）	藤嶋 啓子（関学附）	井上 春美（藤岡中央）	野口 瑞穂（大間々）
小川 良介（四ツ葉学園）	松平 康子（尾瀬）	川上 寛子（玉村）	坂本 将（館林女子）

文責：坂本 将（館林女子）



## 芸術科「音楽Ⅰ」学習指導案

日 時：平成31年1月29日（火）2校時（10：00～10：50）

場 所：群馬県立玉村高等学校 音楽室

生 徒：1年B組 男子19名 女子20名 在籍39名

指導者：教諭 川上 寛子

### 1 題材名 箏を奏でよう ～たまむら歌留多に ふしをのせて～

- (1) 教材
- ・「一面の箏を3人で演奏するための さくらさくら」（日本古謡・山内雅子編曲）
  - ・たまむら歌留多
  - ・箏を奏でよう ワークシート兼テキスト（指導者作成）
  - ・「箏 邦楽器を含む器楽授業のアイデア」（管生千穂・中畝詩歩）より一部抜粋

#### (2) 学習指導要領の内容における位置付け

本題材は、学習指導要領芸術科「音楽Ⅰ」 A 表現 より

##### (2) 器楽

イ 楽器の音色や奏法の特徴を生かし、表現を工夫して演奏すること。

エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して演奏すること。

##### (3) 創作

ア 音階を選んで旋律をつくり、その旋律に副次的な旋律や和音などを付けて、イメージをもって音楽をつくること。

エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して音楽をつくること。

を指導するものである。

### 2 題材の目標

- (1) 日本の伝統的な音楽に関心をもち、箏の音色、旋律、リズムの特徴を知覚して、それらの働きを感受しながら奏法の特徴を生かしてアンサンブル表現を工夫し演奏する。
- (2) 「たまむら歌留多」に日本古来の音階に基づく「ふし」を付け、伝統的な音楽をより身近なものとして捉え、イメージをもって副次的な旋律などを工夫し、音楽をつくる。

### 3 題材の考察

#### (1) 題材設定の理由

箏は、我が国の伝統的な音楽における代表的な楽器であり、発音に限れば、初心者にとっては尺八や篠笛などの管楽器よりも容易である。また、箏は音色の美しさとともに、日本古来の音階による調弦や固有の奏法、それにより奏でられる音色の余韻、音楽のもつ「間」や演奏に係る「所作」などにより、日本の伝統文化の美意識を強く感じることができる魅力的な楽器である。

本題材では、箏を扱う器楽表現と創作表現において、生徒は日本の伝統文化の中にある音楽の美しさや豊かさを、演奏を通じて体験的に味わったり、郷土の文化の一つである「たまむら歌留多」の読み札に、日本古来の音階に基づく「ふし」や副次的な旋律などを創作したりする。箏や我が国の伝統的な音楽の魅力を生かし、「音楽Ⅰ」における創作の学習を取り組みやすく充実したものにするすることで、それらをより身近なものとして親しむ姿勢を育むことにつなげたいと考え、本題材を設定した。

## (2) 生徒の実態

### ア 音楽への関心・意欲・態度

本校は普通科各学年2クラスの小規模校であり、中学校までの学習内容の学び直しや、コミュニケーション能力の育成に力を入れた指導・支援、学習に学校をあげて取り組んでいる。本校では、芸術科は1年生で「音楽Ⅰ」を必修とし、2、3年生からは音楽と美術からの選択履修となる。そのため、「音楽Ⅰ」の授業では音楽に対して意欲的な生徒とそうでない生徒が混在し、授業に臨んでいるのが現状である。このクラスでは、歌唱や器楽の活動に対しては多くの生徒が真面目に取り組んでおり、明るい雰囲気や素直な反応も見られるが、集中力が継続せず、課題を途中で諦めてしまう生徒もいるので、段階的な課題設定や受容的な声かけなどの支援が必要とされる。

### イ 音楽表現の創意工夫

「音楽を形づくっている要素」を知覚し、その働きを感受してイメージをもって表現を工夫することについては、個人差が大きい。表現を工夫し生き生きとした表情で歌唱表現したり、器楽表現したりする生徒もいる一方、音楽表現を工夫すること自体に難しさを感じている生徒もおり、他者の模倣から、要素の知覚・感受や思いや意図をもって表現することにつなげられるよう、これまでも支援してきた。自分の意思を言葉にすることや他者とのコミュニケーションに困難を抱える生徒もいることから、段階的な課題設定に加え、生徒の状況に応じて個別に細かな指示を出すなどの指導・支援や、グループを組ませる際の配慮が必要とされる。

### ウ 音楽表現の技能

器楽の学習では、これまでギターに取り組み、楽器の音色や奏法の特徴を生かした音楽表現をするために必要な基礎的な奏法や、TAB譜の読み方を身に付けてきたが、五線譜の読譜の能力については多くの生徒が十分に身に付いているとは言えない。創作の学習については、本題材が初めての学習となるため、拍子やリズムの捉え方の復習や、箏の楽譜の読み方や記譜の学習が必要である。

## (3) 教材選択の理由

箏の奏法を身に付け、音色を生かしたアンサンブルを行うための教材として、日本古謡として最も有名な楽曲の一つである「さくら」を用いる。「さくら」は、しみじみとした美しさのある日本のふしを味わうことができ、歌詞の情景も思い浮かべやすく、元来箏の手ほどき曲として作られており箏の演奏に適した楽曲である。

「一面の箏を3人で演奏するための さくらさくら」は、一面を3人で演奏し、旋律のパート以外にも副次的な旋律や低音パートを加えることで箏固有の音色や響き、余韻を味わいながら演奏できる。また、生徒の技能の差に応じて役割分担をしながらパートを選択できる点や、常に3人で演奏をしながら集中力を維持できるという点でも、本校の実態に即していると考えられる。

「たまむら歌留多」は、本校の所在地である玉村町の歴史や文化を広く伝え残すため、玉村町と県立女子大の協力のもと、平成20年に作られた郷土かるたである。まだ歴史の浅いかるたではあるが、本校との縁は深く、毎年秋に1年生が玉村の郷土について学ぶための「フィールドワーク in 玉村」では、「たまむら歌留多」を基に地域の調べ学習を行っている。この「たまむら歌留多」に「ふし」や副次的な旋律などを付け表現するという活

動は、教科横断的な取組にもなり、それぞれの活動や学習をより深め、生徒の主体的な学びにつなげられるものだと考える。なお、「たまむら歌留多」は全部で44の句から成るが、本題材では、題材全体のキーワードでもある「日本らしさ」につながる内容、かつイメージを喚起しやすい8つの句を選び、教材としている。

#### (4) 題材の系統と他題材との関連

これまでの器楽の題材では、2学期にギターを用いてTAB譜の読み方を身に付け、様々な表現形態において表現を工夫することができた。その際、旋律と低音の組み合わせでのアンサンブルに多く取り組んできたため、本題材において、副次的な旋律等を加えた3つのパートでのアンサンブルをすることには比較的取り組みやすいと考える。本題材で、高校の学習として初めて和楽器に取り組むが、箏の楽譜がTAB譜に似た「演奏譜」の一種であることや、基本的な弦の弾き方がギターのアポヤンド奏法に似ていることなど、これまでの学習を結び付けながら表現に取り組むことができるようにしたい。

他教科との関連については、本校では学校設定教科である「教養表現」を開設しており、学年の進行にあわせて「表現基礎」「マナーと表現Ⅰ」「マナーと表現Ⅱ」の科目を履修し、社会性や表現力を身に付け、コミュニケーション能力を高めることをねらいとした学習を行っている。1学年で履修する「表現基礎」では、生徒は玉村町の歴史や文化財などの関係施設を見学したり、地域の方々から文化と伝統について講義を受けたりし、町おこしと地域の大切さを理解して、地域の一員としての自覚と社会性を養うという「フィールドワーク in 玉村」の学習を行っている。今回、生徒にとって創作は初めての学習となるが、この「表現基礎」の学習内容と関連させ、学びを生かすことで、創作表現がより取り組みやすく充実したものとなることを期待している。

#### 4 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
①箏の音色や奏法の特徴に関心を持ち、それらを生かして演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。	①音楽を形づくっている要素（音色、旋律、リズム）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて表現意図をもっている。	①箏の音色や奏法の特徴を生かした音楽表現をするために必要な器楽の技能（基本的な奏法、押し手、姿勢や身体の使い方、読譜の仕方）を身に付け、創造的に表している。
②平調子、楽調子、民謡音階による旋律が醸し出す雰囲気の違いなどを感じ取って音階を選び、その音階を基にした旋律や副次的な旋律などに関心を持ち、イメージをもって音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	②音楽を形づくっている要素（音色、旋律、リズム）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、音階の特徴を生かして旋律をつくったり、その旋律に音の組み合わせ方を考えて副次的な旋律などを付けたりし、表現したい音楽をイメージして表現を工夫する。	②音階を選んで旋律をつくり、その旋律に副次的な旋律や低音などを付けるために必要な創作の技能（音の組み合わせ方、記譜の仕方など）を身に付け、創造的に表している。

5 指導と評価の計画 (全8時間)

	時	◆学習のねらい ◇本時のねらい ・学習活動	評価規準【評価方法】
導入 聴いてみよう	1	◆箏と箏に形の似た諸外国の撥弦楽器の演奏を比較しながら鑑賞し、箏の演奏から感じる「日本らしさ」とは何か?について考え、本題材の学習内容に関心をもつ。	
		◇箏と他の楽器の演奏を聴き比べ、箏の音色、旋律(音階)、リズム(間など)の特徴に気付く。 ・箏、古琴、アイリッシュハープ、カーヌーン、トンコリの演奏を聴取し、音楽を形づくっている要素の特徴を捉える。 ・楽器の形や解説などを提示したワークシートを用いて、5つの弦楽器の中から日本の楽器や音楽を見つけ出し、その特徴を理解する。 ・なぜ箏の演奏を「日本らしい」と感じたのかについて考え、グループで意見を交換する。 ・それぞれの意見を発表し合い、クラス全体で箏の音色、旋律、リズムなどの特徴について共有し、本題材の見通しをもつ。	関一① 【観察】 【発言】 【発表】 【ワークシート①】
展開① 弾いてみよう	2	◆箏や日本の伝統音楽について理解し、箏の音色や奏法の特徴を生かして音楽表現をする。	
	3	◇箏や日本の伝統音楽に親しむ。 ・箏の演奏に必要な知識を整理する。	関一① 【観察】
	4	・箏を弾く際の座る位置、爪のはめ方、弦へのあて方などを学び、基本的な奏法を理解して演奏する。 ・わらべうたなどの簡単な旋律を弾き、箏に親しむ。	
		◇箏の音色や旋律、リズムなどの特徴を知覚しながら、「さくら」の第一箏パートを演奏する。 ・箏の歴史を学び、テキストにまとめ、理解したことを整理する。 ・「一面の箏を3人で演奏するための さくらさくら」の範奏を聴き、学習の見通しをもつ。 ・「さくらさくら」を歌詞で歌唱し、歌詞の情景について理解してイメージをもつ。 ・「さくらさくら」の唱歌を聴き、箏で演奏するイメージをもちながら演奏する。 ・弾く時の姿勢、所作、楽譜の読み方などについて学習しながら、「さくらさくら」の第一箏パートを器楽表現する。 ・箏の音色や旋律、リズムなどの特徴を知覚しながら、表現を工夫する。 ・第2箏、第3箏パートの範奏に合わせて第1箏パートを器楽表現し、次回の学習の見通しをもつ。	創一① 【観察】 【演奏】

		<p>◇「さくらさくら」の第2箏、第3箏パートを加えた3重奏の器楽表現に取り組み、箏の奏でる日本の伝統音楽の美しさや豊かさを体験的に味わう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「一面の箏を3人で演奏するための さくらさくら」の範奏を聴き、一人で演奏する際の音色や奏法の違いを知覚する。</li> <li>・「さくらさくら」の第2箏パート、第3箏パートを演奏し、第1箏パートと対比させた際のそれぞれの旋律の動きを知覚する。</li> <li>・第2箏・第3箏パートを演奏し、第1箏を演奏する際とは異なる音色を見つけ、ワークシートに記述する。</li> <li>・「さくらさくら」の第1箏と第3箏パート、第1箏パートと第2箏パートを順番に合わせて演奏し、最後に3つのパートを合わせて演奏できるようにする。</li> <li>・音の重なりが増えていくことで、音楽を形づくっている要素の関連が深まっていくことを知覚しながら演奏する。</li> <li>・3人ずつのグループで、お互いのパートを聴き合い、音色や強弱、速度などを工夫しながら演奏する。</li> <li>・グループごとに3重奏を発表し、達成度を確認する。</li> </ul>	<p>創一① 技一① 【観察】 【演奏】 【ワークシート②】</p>
展 開 ②  つ く っ て み よ う	5	<p>◆「たまむら歌留多」の一句に、日本古来の音階からイメージに合うものを選んで「ふし」を付け、表現したい音楽のイメージをもって「ふし」に合う副次的な旋律や低音などの創作を工夫する。</p>	
	6		
	7	<p>◇「たまむら歌留多」の8つの読み札から一句選び、平調子、楽調子、民謡調子からイメージに合う音階を選んで、イメージをもって「ふし」の創作を工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フィールドワーク in 玉村の振り返りを行い、イメージをもつための復習をして、たまむら歌留多より一句を選ぶ。</li> <li>・平調子、楽調子、民謡調子による演奏を聴き比べ、それぞれの音階が醸し出す雰囲気を感じ取る。</li> <li>・「歌留多の句の世界をより豊かに表現できる音階は何か」という視点で平調子、楽調子、民謡調子から音階を選び、その音階に基づく「ふし」を付ける。</li> <li>・創作した「ふし」は、各自が次時以降も再現できるよう工夫してワークシートに記入する。</li> </ul>	<p>関一②、創一②</p>
		<p>◇「たまむら歌留多」につけた「ふし」を演奏し、それに合う副次的な旋律や低音などのイメージをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3人のグループで、それぞれの歌留多につけた「ふし」を歌いながらまたは語りながら弾き、聴き合う。</li> <li>・3人の作品から一つを選び、表現したい音楽のイメージを共有する。</li> <li>・表現したい音楽のイメージをもって、ふしに合う副次的な旋律や低音パートを創作する。</li> </ul>	<p>【観察】▼ 【ワークシート③】 【演奏】 【記譜】</p>



		<ul style="list-style-type: none"> <li>・箏の伝統的な奏法や、それにこだわらない打楽器的な奏法なども表現の選択肢に入れ、イメージに合う音楽を創作する。</li> </ul>	
		<ul style="list-style-type: none"> <li>◇「たまむら歌留多」の「ふし」に合う副次的な旋律、低音、効果的な発音などの創作を工夫する。</li> <li>・それぞれのグループの工夫をクラスで共有し、それぞれのよさを認め合いながら、創作表現を工夫する。</li> <li>・創作した副次的な旋律と低音などを箏の楽譜に記述する。</li> </ul>	創一② 【観察】 【演奏】 【記譜】 【発表】
ま と め	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆「さくらさくら」3重奏と、グループで創作した「たまむら歌留多」を発表し、聴き合うことで、箏の音色の特徴や音楽を形づくっている要素が生み出すそれぞれのよさや美しさについてより理解を深める。</li> </ul>	
発 表 し よ う		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「さくらさくら」3重奏と、グループで創作した作品を発表し合う。</li> <li>・それぞれのグループ発表について、表現意図やイメージが表現できていたか、箏の奏法や音色などの特徴が生かされていたかについて各自が評価する。</li> <li>・自分たちの取り組みや発表について、振り返りを行う。</li> <li>・再度、箏の演奏や学習から感じた「日本らしさ」とは何か？について問いかけ、考えを記述する。</li> </ul>	技一①② 創一② 【観察】 【演奏】 【ワークシート】

## 6 指導方針

本題材は、箏の器楽表現を工夫し、身に付けた技能を生かして創作を行うものである。箏と発音の仕組みの似た撥弦楽器の演奏を聴き比べ、箏の日本らしさを捉える導入では、特に音色や旋律、リズムなどの特徴に着目することで、創作へと発展させるための手立てとしたい。

まず器楽では、箏の器楽表現を工夫するために、一面の箏を旋律、副次的な旋律、低音と3人で演奏することで、生徒が箏特有の音色の美しさや、独特な間が含まれる旋律、リズムの特徴を知覚・感受し、味わいながら器楽表現に取り組めるようにする。またここで、パートの役割を捉えられるようにすることで、生徒が創作を行う過程において表現の工夫の手がかりとなるようにしたいと考える。

そして創作においては、はじめは個人で「たまむら歌留多」からイメージを喚起する一句を選び、そのイメージに合う音階を選択して「ふし」をつくり、個人の思いや意図をもてるようにする。その後、3人のグループで一つの作品を選び、「ふし」のイメージに合う副次的な旋律、低音、効果的な音づくりを行うことで、個人の思いや意図をグループで共有し、はじめて創作に取り組む生徒たちが、アイデアを出し合い、試行錯誤をしながら音楽づくりを楽しめるようにしたい。

また、本題材では、様々な場面において唱歌を用いたアプローチを試み、生徒の知覚・感受を引き出したり、楽譜の形式にとらわれすぎずに創作した「ふし」などを相手に伝えるための手段として用いたりしている。それらの体験により、生徒が口頭伝承という日本の音楽文化のもつ特色や魅力に気付き、活動を振り返った際には西洋と東洋の音楽文化の違いにも思いを馳せることで、より日本の音楽文化について理解を深められるとのねらいによるものである。

最後に、題材のまとめとして、はじめに問いかけた「日本らしさ」について再考する時間をもつことで、生徒が学習を振り返って日本の伝統音楽や伝統楽器の美しさ、味わいを感じられるようにし、社会や生活の中でそれらをより身近なものとして親しめるようにしていきたい。

## 7 本時の学習

### (1) 本時の目標

「たまむら歌留多」から一句を選び、平調子、楽調子、民謡調子からイメージに合う音階を選んで、イメージをもって「ふし」の創作を工夫する。

### (2) 本時の学習（本時は8時間扱いの5時間目）

時間	<p>○学習のねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の学習活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の働きかけ及び指導上の留意点</li> <li>◆学習活動における評価規準 【評価方法】</li> <li>◎Aと判断する場合のキーワード</li> <li>△Cと判断される生徒への支援・働きかけ</li> </ul>
導入 10分	<p>○前時までの復習を行い、本時の学習課題を認識する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「さくらさくら」3重奏を演奏し、これまで学習してきた奏法やそれぞれのパートの音の動きを確認する。</li> <li>・調弦を変えた「さくらさくら」3重奏の演奏を聴き合い、それぞれの音階が醸し出す雰囲気の違いを感じ取る。</li> <li>・本時の学習内容について確認し、見通しや目標をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・箏を演奏する際の姿勢や、爪のあて方、所作や音色の余韻などに気を配るよう言葉がけし、集中して演奏できるようにする。</li> <li>・3つの音階を聴き比べて感じたことについて問いかけ、生徒の発言により様々なイメージを共有することで、次の活動の手立てとなるようにする。</li> </ul>
展開 ① 20分	<p>○「たまむら歌留多」からイメージをもって一句を選ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「フィールドワーク in 玉村」の振り返りを行い、自分たちの生活している玉村町について思いを馳せる。</li> <li>・選択肢の中からイメージをもって一句を選び、ワークシートに記入する。</li> </ul> <p>○平調子、楽調子、民謡調子から、読み札の世界をより豊かに表現できる音階を選ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3つの調子について、印を頼りに調弦しながら音を奏で、それぞれの音階が生み出す雰囲気や感じるイメージについて、ワークシートに記述する。</li> <li>・自分の選んだ句のイメージに合う音階を選ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料を提示し、学習の振り返りがスムーズに行えるようにする。</li> <li>・「たまむら歌留多」の選択肢は、絵札と読み札を両方提示し、イメージをもつ手立てとなるようにする。</li> </ul> <p>◆関一② 【観察】【ワークシート③】</p> <p>◎平調子、楽調子、民謡調子による旋律が醸し出す雰囲気の違いなどを感じ取って音階を選び、その音階を基にした旋律に関心を持ち、イメージをもって音楽をつくる学習に主体的に取り組んでいる。</p> <p>△各音階が醸し出す雰囲気や、感じるイメージなどを言葉にすることが難しい生徒には、擬音語などを用いて記述するように促す。</p>

<p>展 開 ② 15 分</p>	<p>○イメージをもって「ふし」の創作を工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の選んだ音階に調弦した箏のある場所に移動し、箏を奏でながら歌留多の句に合わせて「ふし」を創作する。</li> <li>・創作した「ふし」は、各自が再現できるように記譜の方法を工夫してワークシートに記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・創作した例や意図などを例示することで、生徒がスムーズに活動に取り組めるようにする。</li> </ul> <p>◆創一②【演奏】【記譜】</p> <p>◎音楽を形づくっている要素（音色、旋律、リズム）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、音階の特徴を生かして旋律をつくり、表現したい音楽をイメージして表現を工夫している。</p> <p>△イメージを音に反映できず、活動が進まない生徒には、参考例を示すなどし、個別に支援する。</p>
<p>ま と め 5 分</p>	<p>○本時を振り返り、次時への見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次回の内容を確認し、グループで音楽づくりを工夫するという目標をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が工夫したところを全体で共有し、生徒が達成感や、活動のヒントを得られるようにする。</li> </ul>